

書評

シリーズ・アメリカ研究の越境

(ミネルヴァ書房、2006-07年)

〔第1巻〕上杉忍・巽孝之編著『アメリカの文明と自画像』

(2006年6月)

〔第5巻〕紀平英作・油井大三郎編著『グローバリゼーションと帝国』

(2006年11月)

有賀貞

1. 最新の研究成果を提示する六巻のシリーズ

評者が担当するのは『シリーズ・アメリカ研究の越境』（全6巻、ミネルヴァ書房、2006年-2007年）の第1巻と第5巻であり、全巻を読んでいるわけではないが、主としてこの二冊を読んだ限りで理解した、このシリーズの性格について論評することから始めたい。

アメリカ（合衆国）という国の成り立ちと現状の特徴を何巻かのシリーズにまとめ、アメリカの総合的俯瞰図を知的読者層に提供しようとする企画には幾つかの先例があるが、『シリーズ・アメリカ研究の越境』は、これまでのものとはかなり性質が異なる。これまでの講座ものは何人かのアメリカ研究者が出版社の編集者に協力して共同で企画した刊行物であったが、今回の越境シリーズはアメリカ学会の創立40周年記念事業の一つとして企画され、ミネルヴァ書房の協力を得て刊行されたものである。これはアメリカ学会として、日本におけるアメリカ研究の最新の状況を提示するとともに、その存在意義を主張しようとした企画であるといえよう。

本シリーズの第一の特徴は、アメリカについて解説しようという啓蒙書的性格よりも、アメリカ研究の最新の視点を提示しようとする研究書性格が著しいことである。文章にも議論にも編者・執筆者の自負が感じられ、迫力ある内容であるが、読みやすすくない部分もある。読者に対するサービス精神は乏しい。「越境」というシリーズ題名の多義的な意味（学問の相互越境と階級・人種エスニシテイ・ジェンダー・国民の相互越境）が最後の第6巻の編集委員座談会で初めて明かされるのは、その乏しさの最たるものである。

第二の特徴は、各巻が学際的に編成されていることである。『総合研究アメリカ』や『USAガイド』のような講座ものは全体として学際的であるが、それぞれの巻はほぼ分野別に編成されていた。このシリーズは、現代に即した新たなアメリカ像を構成するために重要と思われる六つの大テーマをそれぞれの巻でとりあげ、各巻とも二人の共編者によって学際的に編成されている。「刊行のことば」に各執筆者が「意識的に学際的な方法に依拠した」とあるのは言い過ぎであるとしても、学際的な巻に執筆するという意識をもって参加し

たことは確かであろう。この学際性がアメリカ研究の「越境」という第一の意味である。

上記の特色から派生する第三の特徴は、各巻がそれ自体で完結的であるわけではなく、相互交叉的であり、各巻を超えてシリーズ全体を読むことによって、それぞれの巻で扱われている問題について、より総合的な像が浮かび上がってくることである。アメリカの自画像と文明の問題は第1巻からさらに他の巻を読み進むことによって、あらためてその問題について考える機会に恵まれる。グローバリゼーションと帝国とに関わる問題も第5巻だけで扱われているわけではない。日米の文化関係は主として第6巻で扱われるが、それを扱う章は第1巻にも第5巻にもある。「越境」というシリーズ名に相応しく、各巻の相互共鳴は長所であるが、各巻が完結的ではなく、そのテーマに関する重要問題が他の巻で扱われていることは不便であり、どの巻でも扱われない重要問題もあるという短所がある。

このシリーズの第四の特徴は各巻のテーマがアメリカ史全体を貫くものとして考察されることである。「グローバリゼーションと帝国」というとりわけ現代的なテーマに関する第5巻も植民地時代の考察から始まる。通時的に考察するという長所に付随する短所としては、結果として現代に関する章は少なくなり、ラティーノ（ナ）系の人々の「越境」の多様な意味は文明・自画像論の立場からも、グローバリゼーション・帝国論の立場からも、本格的に検討されずに終わるといような短所も生じる。

第五の特徴はこれもシリーズ名の「越境」が含意するように、広い世界的な視野の中にアメリカを置いていることである。第六の特徴として、これは当然のことながら、各編者・執筆者とも21世紀初頭のアメリカと世界の状況に即して、アメリカを再解釈しようとしている。編集委員会の「刊行のことば」は、9・11テロ事件の前と後とでアメリカの進む方向が逆転したように見えると述べ、そして9・11事件以降、アメリカは変わってしまったのか、あるいは一時的な逸脱なのかという問題を提起し、そしてこのシリーズは、それに答えるための学際的な作業として企画されたと説明する。引用はしないが、「刊行のことば」のこの部分の文言は1990年代のアメリカを、2001年以降のアメリカとは対照的に、肯定的に捉え過ぎているように読める。しかしシリーズ全体の議論をみれば、この問題提起は、1990年代のアメリカは2001年以後のそれをもたらす契機を内包しており、アメリカにはより根本的な自己変容が必要であるという解答を予想に入れていることが判る。

2. 一つの文明？無数の文明？——晦渋なアメリカ文明論

第1巻は『アメリカの文明と自画像』と題されている。他の巻と同じく、二人の共編者の一人が序章を書き、他の一人が終章を書いている。序章「『アメリカの世紀』にアメリカとは何かを問う」（上杉忍）は、文明とは何か、自画像とは何か、両者のかかわりは何かについて、とくに説明していないが、「アメリカの自画像は、常に新たな鏡が加わることによって変容を繰り返すという意味で永続的な『未完成』をその特徴としている」（1頁）という含蓄に富む見解が示される。「アメリカでの差別し差別される多様な人々の共通の歴史的経験の積み重ねを通じて、アメリカは明らかに共通の『アメリカ文明』を形成してきた」（2頁）という文章も同様に含蓄が深い。ただし上記の第二の文章に続く文章によって、読者は混乱する。「それは『腐敗した』西洋文明を拒絶し、『野蛮な』先住民文化とアフリカ黒人文化との対決を経て蘇った『人類にかがり火をもたらす新しい文明』として描かれてきた。それは一貫した選民主義的特徴を維持しつつ、今日もなお変化を続けている。」2頁の

文章は全体として何を意味するのであろうか。差別する側に先住民やアフリカ黒人と文化闘争を演じたという意識があったのであろうか。差別された人々は選民主義を特徴とする共通の文明の形成にどのように関わったのか。この部分はことばが不足して難解である。

本書の半分を占めるのは第Ⅰ部「統合の論理としての伝統的アメリカ文明論」である。この部の特徴は伝統的つまりWASP的アメリカの統合の論理として働いたいくつかの理念や論理が今日にどのような形で引き継がれているかを考察し、またそれらが対外行動への国民的支持調達のためにどのように動員されたか、対外的文化関係にどのように関わったかを考察するところにある。第一章「宗教的使命感と理想に燃えるアメリカ」（森本あんり）はウィンスロップからレーガンまで、アメリカの政治指導者のプロテスタント信仰には単純化された道徳的二分法の論理があり、そのような論理が楽観的な自意識と独善的不寛容と世界的使命意識を生み出すことを指摘する。他方で森本はアメリカのプロテスタンティズムにはより自省的で寛容な流れがあることを述べ、その流れが強まり、アメリカ史に組み込まれた自己修正装置の作動を助けることを期待する。要領よくまとめられているが、壮大な内容を持つ章なので、超特急に乗って景色を見る感は免れない。

第二章「アメリカ社会と反知性主義」（前川玲子）は、20世紀のもっとも優れたアメリカ史家ホーフスタッターのアメリカの反知性主義論に触発されて、アメリカの反知性主義に大衆的感情の表明という面のみならず、支配層による民衆統合の手段という面を持っていたことに着目する興味深い論考である。第三章「異端の歷程」（後藤和彦）は、南北戦争の敗北者である南部（白人男性）がどのようにしてアメリカに自らを再統合していくかという精神史を扱う章で、文学に偏しているが、示唆に富む。第四章「『白人優越主義』再考」（中條献）はかつて白人統合の原理として働いた白人優越主義の歴史を回顧しつつ、とくに「再考」と題しているのは、かつてのような白人優越主義はなくなっているが、今日の「無人種主義」は人種による階層化の現実を覆い隠すという意味では人種主義であると著者が考えるからである。第五章「『文明化された』家族の国アメリカ」（高橋裕子）は日本の女性の地位向上のために貢献した明治期のアリス・ベーコンと占領期のベアテ・シロタ・ゴードンを比較しつつ、アメリカで文化的統合のための家庭モデルとなっていた中流家庭像を日本に適用しようとする際の意識の問題に注目した興味深い論考である。第六章「『アメリカ』を輸出する国アメリカ」（宮本陽一郎）は1930年代以降のアメリカ研究の成立勃興に触れつつ、冷戦期におけるアメリカ研究がアメリカ像の輸出者として対外的に果たした文化政治的役割を論じる（日本で1951年に京都アメリカ研究夏季セミナーが始まるとあるが、日本でのアメリカ研究夏季セミナーは1950年東京で開催されたのが最初である）。第Ⅰ部で20世紀前半のラディカリズムの批判的アメリカ像は考察の対象にならないのは当然であるが、「人民」とか「平均的アメリカ人」とか「アメリカ的生活様式」というこの時代に多用されたことばのイデオロギー的表象的統合機能を分析した章がないのは惜しい。

第Ⅱ部は「新しいアメリカ人像の模索」と題され、第七章「戦争とアメリカ化」（中野耕太郎）、第八章「マノリティー集団の自画像とアメリカ像の変容」（新田啓子）、第九章「多文化主義教育におけるアメリカ像の変容」（坪井由美）という多様な力作が揃う。第七章は第一次世界大戦に際して多様なアメリカ人を戦争に動員する必要に直面した政府および軍のアメリカ化政策を考察した研究であり、第八章は戦間期の二人のアフリカ系アメリカ人作家を取り上げて、彼らがそれぞれ標題とは裏腹に、黒人という集団的帰属感をも

たず、それを拒否した孤の周辺者の立場からアメリカを見たことを論じる。第九章は多文化主義教育がどのようなアメリカ像を展望しているかという問題を中心に据えて、筆者のアメリカ教育史についての理解と現地調査に基づいて現代アメリカ教育事情を描いた啓発的な論考である。

第Ⅲ部「世界のアメリカ像」は第十章「トクヴィルからネグリまで」(宇野邦一)と第十一章「約束の地と墮落した女」(池内恵)の2章からなる。第十章はアメリカに新しいものを見出したヨーロッパの数人の著名な思想家を取り上げて論じる。マルクスが無視されているのは現代的というべきなのであろう。第十一章はアラブ知識人の見たアメリカを主題として、アメリカに約束の地を見出しアメリカに定着したキリスト教徒レバノン人ヒッティと、アメリカに拒否的反応を示したイスラム教徒エジプト人クトゥブとを比較考察する。

終章は「自画像は炸裂する——複数のアメリカ、無数の文明」(巽孝之)である。題も度肝を抜くものであるが、巽独特の連想と議論は評者の知識と理解を超えて自在に飛翔する。一つの文明という上杉と異なり、巽は無数の文明という。なぜ「アメリカ」は複数であり「文明」は無数であるのか直接の説明はない。終章の趣旨を評者なりに理解するとすれば、アメリカ文明は当初から共和国と帝国という矛盾を内包していたが、アメリカの影響力が世界に及ぶグローバル化の時代には、世界のアメリカ化と国内の多様化との連環、内外の摩擦葛藤の連動によって、アメリカの自画像が無数に炸裂するのであり、その炸裂を通じてアメリカ文明の未来が形成されるということであろうか。そうであるとすれば、巽は現在から近未来のアメリカを文芸的思想的に百家争鳴の創造的な時代と見ているのである。しかしその大炸裂状況を具体的に描く章はこの巻にはない。

3. 国民国家と帝国との間——食い違うアメリカ帝国論

第5巻『グローバリゼーションと帝国』は第Ⅰ部「ヨーロッパの膨張とアメリカ合衆国の起源」、第Ⅱ部「文化の越境と融合」、第Ⅲ部「戦争とアメリカニズム」、第Ⅳ部「グローバリゼーション時代のアメリカ合衆国」の4部12章からなり、その前後に序章と終章が配置されている。第Ⅰ部で大西洋史的視点に立って植民地時代から19世紀前半までのアメリカ史を再考し、第Ⅱ部でアメリカ文化の海外進出のもたらした問題を、第Ⅲ部でアメリカの対外戦争の思想的基盤を検討し、第Ⅳ部で近年のグローバリゼーション時代のアメリカを検討するという構成をとっている。

序章「膨張する合衆国と世界」(紀平英作)はグローバリゼーションとは何か、帝国とは何かをとくに定義していないが、紀平は帝国を国民国家とは現実には両立するが概念的には対極的なものとして想定している。彼はアメリカが発足当初から帝国だったわけではなく、帝國的な構えをもった国民国家であったと考える。第二次世界大戦後アメリカは国民国家と帝国の混合体となり、さらに近年グローバリゼーションの中で国民国家の性格を弱め純然たる帝国になってきたとみる。国民国家論に軸足を置いた興味深い議論である。

第Ⅰ部第一章「独立革命・近代世界システム・帝国」(和田光弘)は大西洋史と世界システム論との観点を取り入れて植民地時代から建国初期までを扱い、独立に伴う国民国家形成について考察し、建国期指導者たちの帝国観に触れて、彼らが帝国ということばを用いたとしても対等な部分からなる大国という意味しかもたなかったことを指摘する。独立革命もこのような帝国観をめぐる本国との闘争として始まったといえよう。第二章「ブラッ

ク・アトランティックの世界」(西出敬一)は、ヨーロッパ人の西半球植民地に広く導入された奴隷制の比較研究で、つねに新しい奴隷を補充したカリブ海奴隷制に対して、北米イギリス植民地・合衆国南部の奴隷制がとくに独立後クレオール奴隷制の性格を顕著にしたことを指摘している。第三章「先住民・フロンティア・ボーダーランド」(水野由美子)は複数の先住民族が複数のヨーロッパ系支配者に直面したボーダーランドとしての現合衆国南西部について、スペイン・メキシコ・合衆国による先住民支配を比較検討しつつ、新たな支配者合衆国の既存住民に対する法的扱いの使い分けに注目している点に特色がある。

第Ⅱ部第四章「友情の帝国」(小檜山ルイ)は『『東洋の七つの女子大学』に見るアメリカ的『帝国主義の文化』』という副題をもつ。20世紀初頭、七つのキリスト教女子大学(その一つは東京女子大学)の援助に尽力した教派間協力機関の資料を手がかりに、女性による女性のための海外伝道がどのような文明観使命感に立って行われたかを解明する力作である。第五章「ハリウッド映画と『アメリカニゼーション』」(戸阪雄二)は、輸出されたハリウッド映画がどのようなアメリカ像を描いたか、受け手の国にどのような文化的影響を与えたか、海外輸出における業界と政府との関係はどうであったかなどを、目配りよく論じ、近代日本に文化面でのアメリカニゼーションがあったとすれば、それは多分に理念型としてのアメリカの投射であったと結論している。第六章「忘却と空白の詩学」(大和田英子)は、ポストコロニアリズムの視点に立ってフォークナーの作品を読み解き、彼が南部の内側から時空を超えて越境し内なる批判の装置を仕掛けたと主張する興味深い論文であるが、それがこの第Ⅱ部の章であることにはやや違和感が残る。

第Ⅲ部第七章「アメリカ正戦論」(篠原初枝)はなぜ20世紀が進むにつれてアメリカは海外で戦うことを受け入れやすくなったのかについて、戦争を肯定する「アメリカの大義」、アメリカ特有の戦争の社会的・文化的受容性、アメリカの学問による戦争の合理化をとりあげ、周到に論じる。第八章「戦争とジェンダー」(兼子歩)は戦争がジェンダーに及ぼした影響を人種・階級・セクシュアリティと関連させて考察し、第二次世界大戦に動員された黒人男性は人種差別された軍隊のなかであっても、従軍経験により自衛技術と男らしさを回復する機会を得たことなど、幾つかの注目すべき論点を提示する。一言付け加えるとすれば、アメリカ文化が男性的価値を強調するようになった中で、女性が男性の領域に進出するためには、そのような文化に同調する必要がある、それが軍の最高司令官たる大統領の地位を狙うための条件であるということであろう。第九章「敗戦体験とアメリカニズムの変容」(松岡完)は、ベトナム敗戦の経験で大きな衝撃を受けたアメリカが、その後どのようにその記憶と戦い、その戦争のイメージを変更してきたかを考察して興味深い。松岡が言及する「ネバー・アゲイン」の意識が為政者に今日まで受け継がれているとすれば、それは徴兵制の軍隊によって局地戦争を戦わない、戦えないという意味においてであろう。その意味ではイラク戦争はポスト・ベトナムの戦争である。

第Ⅳ部には第十章「グローバルな貿易・投資自由化と地域統合のあいだ」(中本悟)、第十一章『『デジタル・パクスアメリカーナ』』(喜多千草)、第十二章「ポスト冷戦とアメリカ」(西崎文子)と、グローバリゼーション進展期の世界におけるアメリカについての啓発的な力作が並ぶ。中本、喜多による二つの章はアメリカ主導で始まったグローバリゼーションの実態を、西崎の章は冷戦後の冷戦観とイラク戦争への道との思考の関連を分析する。

終章「二一世紀の世界とアメリカのゆくえ」(油井大三郎)はグローバリゼーションの

進展の中で盛んになった帝国論の論点を紹介し、アメリカ帝国を時代区分して、将来を予測する。油井は自らの帝国論を展開していないが、グローバリゼーションの中での「政治的再国家化」現象に注目しているように見える。アメリカ帝国史の時代区分については、国民国家と帝国との関係の議論からみて、彼はアメリカが建国期から帝国であったと考えていると推察され、その点では序章の紀平の帝国観と若干の差異がある。油井はパクスアメリカナの時代は世紀半ば頃まで続く可能性があり、その間アメリカは戦闘的な「単独行動主義」路線とより穏やかな「国際協調主義」路線との間で振幅を繰り返すと予想している。「刊行のことば」の大上段に構えた問題提起とは対照的なあっさりした答えであり、それはこの巻に9・11事件の世界史的・国内史的文脈を考察する章がないこととも符合しているが、それなら「刊行のことば」の問題提起は何だったのかということになる。パクスブリタニカ100年の例からパクスアメリカナも21世紀半ばまで続く可能性があるというのも、過去のモデルに頼りすぎている。過去のモデルに頼れば、パクスアメリカナ衰退期には、20世紀初頭のパクスブリタニカの衰退期と同じく、超帝国主義現象と経済問題の政治化現象、国際協調と国際対立とが混在する第二次帝国主義時代ともいべき時代が到来すると予測せざるをえない。帝国論は21世紀のゆくえを語りうるか。

4. 越境シリーズの真骨頂

評者は、第1巻と第5巻のそれぞれについて共編者の間に見方の相違があることを示唆したが、これはある程度当然と考えている。開かれた学会の個性的集団が一つの整然としたアメリカ像を提示することの方が不自然であろう。この越境シリーズの主たる意義は、最近の研究成果に基づいて現代の状況に即したアメリカ像を形成するために、相互に関連する六本の柱を立て、さまざまな位置と角度からそれらを照射してみせたところにある。それが越境シリーズの真骨頂であり、それゆえ評者はこの企画の完成について企画者・執筆者各位に心から祝意と敬意を表したい。ここに提示された視点や議論に照応するものは概してアメリカにおけるアメリカ研究にも見出せるが、アメリカのアメリカ研究の動向と重なる面があるのは日本の知的状況の反映であり、模倣や追従ではない。越境シリーズの構成は独自のものであり、執筆者たちが提示するアメリカ像はしばしば両義的でニュアンスに富み、刺激的である。このシリーズは日本のアメリカ研究の水準の高さを示す。評者の願いは、シリーズ執筆世代がその研究成果を国内に留めることなく、より積極的にトランスナショナルに発信し、国際交流の中でさらに自らを鍛えていくことである。